

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる

本物の英国文化を体現させるために



中世イギリスの建物群と英語漬けになれる環境を整え、「パスポートのいない英国」を実現した国際研修施設「ブリティッシュヒルズ」。名誉館長の故・川田雄基氏は、イギリス文化に精通した人物であり、平成6（1994）年の開館から平成24（2012）年にご逝去されるまで、この施設に命を吹き込むために「文化の語り部」として活動を続けてきました。前職の三菱商事時代から川田氏を知り、交流を続けてきた人物に河村幹夫氏があります。海外駐在を通じて異文化理解の重要性を感じ、ホームズ研究を続けられてきた河村氏に川田氏との思い出話や異文化を学ぶ大切さについてお伺いしました。（構成・文：山口剛/文中敬称略）



昭和20（1945）年8月、佐野学園の創立者である佐野公一・きく枝夫妻は、太平洋戦争の終戦を東京・上野で迎えた。日本が同じ過ちを繰り返さずに、平和な世界を実現するためには、外国人と理解し合える若者を育てることが必要だと痛感した佐野夫妻は、昭和32（1957）年、東京・神田にセントラル英会話学校を設立した。高度成長期が続くなか、仕事で使える英語を学びたいという若者が押し寄せ、昭和39（1964）年には神田外語学院に改称し、急速に規模を拡大していった。

神田外語学院の事務長として、経営を任されていたのは佐野夫妻の長男、佐野隆治（後の理事長、現会長）である。英語を母国語とする外国人教員を大勢採用するとともに、最新の視聴覚設備やビデオ教材を整えながら、学生が本物の英語を学べる学習の実現することに惜しみない投資を続けていた。

だが、佐野隆治にはジレンマがあった。外国語を習得するには、朝から晩まで外国語の環境にいるのが最適である。しかし、学院があるのは東京の神田。校舎を一步出れば、せっかく学んだ外国語も飲屋街の喧噪にかき消されてしまう。海外の大学と提携を結び、現地での語学研修のプログラムも積極的に整えたが、経済的な理由があるので、すべての学生が参加できるわけではない。「バスでも行ける日本国内に本物の外国を体験できる研修施設をつくりたい」。佐野のなかで、その思いは年々強くなっていった。

昭和62（1987）年4月、千葉・幕張に神田外語大学が開学した。昭和50年代後半の文部省は、大学受験者数の減少を見込んで大都市圏での大学新設に歯止めをかけていた。だが、佐野学園は「外国語だけではなく、文化とコミュニケーションを学ぶ大学をつくる」ことを掲げ、新大学設置の認可を得たのである。

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる

「本物の英国文化を体現させるために」



文化を命がけで伝える館長がいなければ、
「本物の疑似体験」は成立しない

大学新設を成し遂げた後に、佐野隆治が着手したのが前述の国際研修施設の設定である。佐野は国内各地の候補地を訪れているうちに、福島県の羽鳥湖高原の17万坪の土地と出合った。見渡す限り森が続く高原の頂上であれば、外国のスケール感と日本の日常から切り離れた環境が実現できると確信したのである。

土地の次は建物などのハード面である。佐野には、外国への抵抗感をなくすには、日本国内で外国生活の疑似体験をすることが有効だという持論があった。欧米諸国に出張しながら各国の建物を視察し、英語の母国であるイギリスの環境を再現することに決めた。中世英国の村をつくるコンセプトを立て、イギリスの設計会社に、時代考証から景観、建物の設計に至るまでを依頼した。建物に使われるオーク材、建具、調度品は、すべてイギリスから取り寄せることにした。

佐野が徹底的にこだわったのは、「本物の疑似体験」だった。料理ではフランスの調理学校「ル・コルドン・ブルー」にシェフの派遣を要請。イギリスの正式なマナーに通じたパトラー（執事）やプロトコル・オフィサー（儀典官）を筆頭に、サービススタッフも外国人で固めることになった。しかし、ひとつだけ空席があった。館長である。環境や建物の意味を理解し、外国人スタッフを束ね、日本の若者たちに外国文化を命がけで伝えようとする日本人の館長がいなければ、「本物の疑似体験」は成立しないのである。





適任者を探すために、さまざまなネットワークを駆使していた佐野のもとにある人物の名前が挙がってきた。川田雄基。三菱商事に勤める商社マンである。川田はイギリスと縁の深い人物だった。

川田雄基の曾祖父は川田小一郎。土佐藩の武士で、事務方として幕末の藩財政改革に手腕を振るった。明治維新後は同じ土佐藩の岩崎弥太郎が興した九十九商会（後の三菱商会）に参画。黎明期の三菱や明治前期の政財界の発展に寄与し、明治28（1895）年には男爵に叙せられたのである。息子の川田龍吉はイギリスのグラスゴーに留学し、最先端の造船技術を学び、横浜ドックの建設や函館ドックの再建を任された人物だ。ちなみに、北海道の貧農の生活を改善するために後に「男爵イモ」と呼ばれるジャガイモの品種を持ち込んだのも龍吉である。

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる

本物の英国文化を体験させるために



「こんな施設をつくれるわけない」と思った川田に
佐野は「ぜひ現場を見てください」と言った

この川田龍吉を祖父に持つ、川田雄基は幼い頃からケンブリッジ大学出身の家庭教師のもとで英語とイギリス文化を学んだ。学習院では日本文学や映画に没頭し、三島由紀夫をインタビューしたこともある。日本と世界の歴史と文化に通じ、商社マンとして世界各国での生活経験を持つ、稀有な人材だったのだ。

そんな高い教養を持つ川田も国際ビジネスの最前線である商社という職場においては持ち前の能力を発揮し切れていなかったようだ。昭和50年代後半に川田の上司を務めていた人物に河村幹夫がいる。

河村は昭和33（1958）年に一橋大学を卒業した後、国内勤務を経て、ニューヨーク、モントリオール、ロンドンなどで足掛け約20年にわたり海外での勤務を経験した。ロンドンから帰国した昭和50年代半ばには、新たに設置された情報関連の事業部長に抜擢された。そのときに、別の部署の部長から川田のトレードを打診されたのである。河村は当時の状況をこう振り返る。





「川田君が華族の末裔であり、高い教養を持った人物であることは噂に聞いていました。しかし、商社のビジネスは切った張ったの泥臭いもの。性格が優しい川田君には肌に合わなかったのか、営業成績はあまりよくなかったようです。それでも、社員のよい面を引き出すのも会社の役割だと考えていた僕は、川田君を引き受けることにしました」

佐野隆治が川田の存在を知ったのは、川田が河村の直属の部下になった数年後のことである。福島の国際研修施設は基本設計が完了し、基礎工事も始まっていた。一刻も早く、この施設に文化を根づかせてくれる日本人館長を探さなければならない。人づてに「三菱商事に川田雄基というイギリス文化に造詣の深い人物がいる」と聞いた佐野は、早速、面会を申し込んだ。

東京・神田の佐野学園を訪れた川田は、事務所の机に広げられた設計図と模型に舌を巻いた。だが、それでも半信半疑で「日本でこんな施設をつくれるわけない」と思っていたという。その心の内を見抜くように、佐野は、「川田さん、ぜひ現場を見てください」と言ったのである。

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる

本物の英国文化を体現させるために



中年男性が転職するのは一般的ではない時代
辞職を申し出た川田と福島の現場へと向かった

川田雄基は福島の羽鳥湖高原にある工事現場を訪れた。まだ基礎工事が行われていない段階だったが、川田は礎石の積み方を見ただけで、「これは本物だ！」と理解したという。工事現場では基礎工事の際に掘り起こされた巨石がゴロゴロと置かれている。放っておけば処分されてしまう。川田は、「その石、捨てるな！」と怒鳴りだしたという。すでに彼の頭のなかにはシェイクスピアの『リア王』のある場面の情景が描かれ、そのイメージを再現するには、それらの巨石が必要だと思ってしまったのである。

帰京後、佐野学園の事務所を再訪した川田は「石を捨てるな！と叫んできました」と佐野隆治に話した。その話をうれしそうに聞いていた佐野は改めて事業への参画を川田に申し入れた。川田は「お世話になります」と答えた。

佐野学園が進める国際研修施設の事業への参画を決めた川田は、上司である河村幹夫に辞職の申し入れをした。長い海外勤務を通じて、三菱商事を勤め上げるだけじゃ人生じゃないと思っていた河村は川田の申し入れを受け入れた。だが、当時は中年男性が途中で辞職して、転職するのは一般的ではなかった時代。河村は部下がどんな進路を考えているか、率直に聞いてみたという。



「それが要領を得なかったんですよ。なんだか、神田の英語学校が経営するイギリス村の責任者になると言う。どんな施設だと尋ねれば『まだ出来ていません』と答える。正直、不安でしたよ。かわいい部下が、変な遊園地のような場所に転職して、路頭に迷うことだけは避けたかったのです」

川田は近いうちに福島現場に行く用事があると話した。河村は、それならば自分の目で確かめてみようと、同行を申し出た。仙台まで新幹線で行き、そこからは三菱商事の支社で車を借りて、福島の羽鳥湖高原を目指した。長い冬は終わったが、まだ小雪が舞っていた肌寒い日だった。県道から工事現場へと続く道は舗装されておらず、雪解けによってぬかるんでいた。ふたりを乗せた車は泥だらけになりながらその奥へと進んでいった。

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる

本物の英国文化を体現させるために



時代が変わり、増加する学生の語学研修旅行
イギリスの正式なマナーを学生に厳しく教えた

到着したふたりを出迎えたのは佐野隆治だった。佐野は、唯一完成していた職員用の宿泊施設に泊まり込みで現場の指揮を執っていた。佐野は河村幹夫を案内しながら、なぜ本物のイギリスを疑似体験できる施設を建てなければならないかを説明した。

半信半疑だった河村もやはり福島の工事現場を体験し、そして佐野の話をじっくりと聞いたことで、この事業が本物であることを認識したのである。そして、その場で「佐野さんにお世話になってよいと思いますよ」と川田雄基に伝えたという。三菱商事で自分の面倒を見てくれた上司が自分の転職に納得してくれたことに、川田はほっと胸をなで下ろした。

平成6（1994）年7月、国際研修施設「ブリティッシュヒルズ」が開館した。初代館長に就任した川田は、パトラーやプロトコル・オフィサーたちとともに、本式のイギリスのマナーを再現し、訪れる客人たちをもてなした。イギリス大使も訪れるようになり、ゴルフのコンペティション「アンバサダーカップ」も開催された。





学生たちの研修も当初は神田外語学院や神田外語大学だけだったが、修学旅行が従来の観光旅行ではなく、教育的な体験に比重が置かれるようになると少しずつ他大学や高校からの宿泊研修の来客も増えてきた。川田はリファクトリー（食堂）での服装やマナーを徹底するなど、イギリスの文化を厳しく教えた。

川田の上司であった河村も三菱商事を辞めて、大学教授に就任した。「三菱商事だけが人生じゃない」という言葉通り、もうひとつの人生を歩み出したのである。河村は大学で教え始めると、ゼミの学生を連れてプリティッシュヒルズを訪れるようになった。夏になると、家族や友人たちとも訪れ、大好きなテニスに没頭したという。実は、河村自身の人生もイギリスを抜きには語れないのである。

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる

本物の英国文化を体現させるために



文化を学べば外国人を理解できる
壁に直面したロンドンで、その鉄則を実践した

河村幹夫はニューヨーク、モントリオールでの海外駐在の後、昭和50年代の終わりに、約5年間にわたりロンドンで勤務した経験を持つ。三菱商事が出資する先物取引の会社の社長兼会長という職務である。

ロンドンに着任した当時、河村はある壁に直面した。先物取引の業界は、ギルド（同業者組合）の社会である。30社ほどの会社の社長たちが集まっては情報交換を行い、その情報をもとに自らの会社の事業を行っていく。

組合に属するのは基本的に白人の社長たちである。ひとりのインド人を除き、有色人種は河村だけである。河村はイギリスの排他的な社会を痛感した。社長たちは挨拶こそしてくれるが、何の情報も教えてくれない。情報が命の先物取引の世界で、彼らとコミュニケーションが成立しないのは致命的である。





河村は初心に帰った。20代の終わりに、初めて命じられたニューヨークでの海外勤務。アメリカ人と渡り合おうと必死にアメリカの歴史を学んだ。モントリオールでも、現地の取引先と家族ぐるみの付き合いをしながら、カナダの文化を学んだ。文化を学べば外国人を理解できる。河村はここロンドンでもその鉄則を実践しようとしたのである。

そんなときに出会ったのがシャーロック・ホームズだった。ギルド社会が形成されたのは19世紀の半ばから後半。ホームズの物語もまさにその時代のロンドンが舞台なのである。河村はホームズ研究こそが文化理解の糸口になると確信し、行動を始めた。

まず、シャーロック・ホームズ協会に入った。ギルド社会と同様に、表向きは誰にでも門戸を開いていたが、普通に申し込んだところで入会を拒まれるのは分かっていた。顧問弁護士に「絶対に断られない申し込みのレターを書いてほしい」と依頼し、見事に入会したのである。

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる

「本物の英国文化を体現させるために」



シャーロック・ホームズ研究が開いた
イギリス人社長たちとの深い交流

それからはひたすら行動である。バッグには、ホームズの小説、地図、カメラの3点セット。仕事の合間を見てはロンドンの街に繰り出して、小説の舞台になった場所を探し、写真を撮る。愚直に続けていると、ギルドの社長たちに変化が表れ始めた。

ある社長は「カワムラ、あの場所には行ったか？ あの事件の現場だぞ」とアドバイスしてくれる。他の社長は「ホームズが好きなら、ぜひ、初版本を手に入れるべきだ」と言い、「あの古本屋に売っているが値段が高い」と教えてくれて、あげくの果てには値切りのノウハウまで指導してくれたのである。

「僕が単にイギリスが好きというだけでなく、活動をしながら文化への理解を深めようとする姿勢を認めてくれたのだと思います」





こうして河村幹夫はギルドの社長たちとの交流を深めながら、仕事に有用な情報も手に入れられるようになっていった。

先物取引のギルドで、イギリス人の社長たちと付き合いを深めていくうちに、河村はあることに気づいた。大学で歴史や文化、芸術を専攻している人物が数多くいたのだ。

イギリスは、帝国主義の時代、世界中に植民地を展開してきた。第二次大戦以降は、「斜陽の大国」と言われ経済的には世界の頂点からは転落したが、国際ビジネスにおける戦略的展開ではイギリス人特有の巧さがあると河村は指摘する。

「自国の文化と先人たちの歩みを学ぶ姿勢、それこそがイギリス人の国際ビジネスにおけるセンスを養っていると理解できました」

本物の英国文化を体現させるために

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる



本場のフィッシュアンドチップスに
歓喜した日本カナダ学会の参加者たち

河村幹夫には、ブリティッシュヒルズでの忘れがたい思い出がある。平成9（1997）年に開催された「日本カナダ学会」の年次研究会である。日本とカナダの交流を目的とした同学会の設立は昭和52（1977）年。モントリオールでの駐在経験があった河村は、縁あって同学会の創設会員となった。毎年、主に大学の施設で開催されていた年次研究会だったが、平成9年は河村の発案でブリティッシュヒルズでの開催が決まった。年次研究会に参加するメンバーはイギリスの文化に精通した人物ばかりで、ブリティッシュヒルズでの開催を心待ちにしていた。

事前の打ち合わせでブリティッシュヒルズを訪れた河村は、「フォルスタッフパブ」に行き、現場を仕切っていたパブリカン、ビル・ブラウンに相談をした。河村は最終日のランチをパブで開くことをブラウンに提案。メニューはフィッシュアンドチップスにしてほしいと頼んだのだ。そして、河村は彼にある頼み事をして、ブリティッシュヒルズを後にした。

年次研究会の最終日、会議を終えた参加者たちはフォルスタッフパブに集まった。英字新聞に包まれたフィッシュアンドチップスが配られた。参加者たちからは歓喜の声が上がった。





イギリスでフィッシュアンドチップスと言えば、スタンドで購入するファストフードである。新聞紙の袋に入れられた揚げたての魚とポテトのフライに塩やピネガーを振りかけて食べるのがイギリス流だ。本場さながらのパブで、新聞に包まれたフィッシュアンドチップスをいただく。そして、新聞はきちんと英字新聞を使うという徹底ぶりだ。

打ち合わせのとき、河村はブラウンが英字新聞を毎日読んでいることを確認し、学会のランチで使えるように保管してほしいと頼んでいた。日本とカナダの交流に尽力する人々が、福島の中に現れたイギリスの村で本場のフィッシュアンドチップスを味わう。プリティッシュヒルズと河村のもてなしに、イギリス通の参加者たちが心から喜んだエピソードである。

第5回 河村幹夫
外国人との交流は文化理解から始まる

本物の英国文化を体験させるために



若者に本物に触れさせ、度胸をつけさせることが
ブリティッシュヒルズのノブレス・オブリージュ

平成26（2014）年、ブリティッシュヒルズは開館20周年を迎えた。開館当初から、この施設が掲げてきた理念がある。「ノブレス・オブリージュ」である。イギリス文化に詳しい河村幹夫はノブレス・オブリージュについてこう解説する。

「中世ヨーロッパ、騎士道が盛んだった時代に生まれた言葉です。その言葉の通り『位の高い者（ノブレス）の義務（オブリージュ）』という意味です。戦いに勝ったとき、下の位の戦士たちが頭領に向かって、『頭領だけで独り占めするな！』と主張したのが起源だと言われています。もともとはフランスで発生した言葉ですが、フランスではもう残っていません」

河村によると、今もイギリスの中流以上のクラスにはノブレス・オブリージュの概念が残っているという。学校で習うわけでもなく、親から子へと受け継がれている価値観なのである。イギリスの皇室では、皇太子たちが軍隊に入隊し、実際の戦地に赴くことがある。国家の危機が生じたときに、位の高い者が率先して行動するのも、ノブレス・オブリージュの精神に基づくものといえるのだ。





学校は常に学生の利益を最優先にする。佐野学園は設立以来、この原則を守りながら事業を拡大し続けてきた。神田外語学院では、ひとりでも多くの学生が学べるように校舎を拡大し、外国人教員の大量採用や視聴覚設備など惜しみない投資を行ってきた。法律では専修学校修了者は大学に編入学できる資格を持つと定められているが、神田外語学院の卒業生を受け入れる大学がない現実が原動力になって設立した神田外語大学。そして、卒業生の転職をサポートする「神田外語アソシエイツ」や、社会人がビジネス英語を学ぶ「神田外語キャリアカレッジ」、さらには、卒業生が児童英語教育に携われる機会を提供する「神田外語キッズクラブ」。神田外語の事業はすべて学生のために発案されたのである。

佐野学園が関連する事業で得た資金を投じて、日本国内に本物の外国の環境をつくったブリティッシュヒルズ。語学だけでなく、文化や歴史、そして礼儀作法についても教える。外国人と対等に渡り合えるように、海外経験のない若者たちに本物に触れさせ、度胸をつけさせる。それこそが、ブリティッシュヒルズが次世代を担う若者たちに果たそうとしているノブレス・オブリージュなのだ。

第5回 河村幹夫

外国人との交流は文化理解から始まる

「本物の英国文化を体現させるために」



この部屋でホームズの時代を感じて、 日本人の内にある武士道精神を再発見してほしい

平成26（2014）年の秋、河村幹夫はこれまで集めてきたシャーロック・ホームズの書籍やグッズ、ヴィクトリア時代の史料などをブリティッシュヒルズに寄贈した。「シャーロック・ホームズの思い出」の初版本をはじめとする古書の数々。ホームズの秘書から贈られた手紙。ヴィクトリア時代の音を再現する「ポリフォーン」や当時使われていたテニスやクリケットの道具。どの史料も、ホームズの時代、そしてイギリスの文化を感じるには格好の教材だ。これらの品々は宿泊棟「チャーサー」のラウンジに展示されており、河村が案内役を務めるイベントを開催する際には、参加者はこれらの史料に実際に触れることができる。

「ホームズの物語を読んでいると、彼特有の正義感を感じることができません。つまらない事件には見向きもしないのに、困っている依頼人がいれば経費程度の報酬で引き受けてしまいます。そして、殺人事件であっても私利私欲のものであれば一刀両断に処する一方で、誰かを助けるためにやむを得ず犯した殺人には無罪であると言い切る。弱きを助け、強きをくじく。ホームズという人物にも、ノブレス・オブリージュの精神が宿っていると思います」



「そして、ヨーロッパの騎士道と日本の武士道には共通点があります。弱い者を守り、強い者に挑んでいく勇氣。そして、卑しい行動は決してしないという規範です。私は日本人が正しい行動をしていくうえで、武士道から学ぶべき点は数多くあると感じています。シャーロック・ホームズの物語を読み、そしてブリティッシュヒルズのこの部屋でホームズの時代に触れて、日本人が自分たちの中にある武士道精神を再発見してくれればうれしいですね」

河村幹夫（かわむらみきお）

昭和10（1935）年、長崎市生まれ、名古屋市育ち。一橋大学経済学部卒業後、三菱商事に入社。ニューヨーク、モントリオール、ロンドンで海外勤務を経験。在職中には故・川田雄基ブリティッシュヒルズ名誉館長の上司を務めた。平成6（1994）年に同社を退職し、多摩大学教授に就任。経営学博士。ロンドン駐在時代からシャーロック・ホームズに関する研究を始め、多数の著書を執筆。平成26（2014）年にはホームズに関する原書や史料などをブリティッシュヒルズに寄贈した。現在は企業の顧問や大学の監事、文筆家として活躍している。令和元（2019）年11月永眠。享年84歳。